

2026年10月18日（日）

老球の細道947号

生涯バスケットボール選手

会津バスケットボール協会 室井 富 仁

寝ても覚めても「夢を見る」ことは脳の働き、人生の充実にとっても大切なことだと思う。私は今でも毎日のように夢を見る。幼少の頃は幽霊の夢を見たり、怪獣の夢を見たり、怖いものの夢を見たりすることが多かったが、今ではバスケットボールの夢がほとんどである。しかもコーチとしての夢ではなく選手としてのそれが多い。

70歳を越えているのに大会前だから合宿練習をしなければならない、ユニフォームを忘れた、シュートが届かない等等、悪い夢ばかりである。現役時代ある程度のレベルまではやり切ることができたが、全国レベルでの結果が思うようにいかなくて現役生活を終えてしまった。そんなことが悔いに残っているから変な夢ばかりみるのかもしれない。

先日、わが親愛なるコーチの佐藤公希氏、渡部大介氏からバスケットボール「オーバーエイジ40、50」の東北大会に参加して来た話を聞いた。世の公務員の働き改革とは逆行して自分の仕事とユースチームのコーチで忙しい日々を送っている両氏は、さらに時おり選手としても現役生活を続けていることを聞きびっくりした。

「オーバー40」「オーバー50」とは40歳以上、50歳以上の大会で、日本バスケットボール協会の社会人連盟が主催する公式な大会である。県大会から東北大会、全国大会までつながる大会である。最近は高齢者が元気であり、40歳、50歳はまだまだバリバリの選手が多く、60歳、70歳近くでもコート縦横無尽に駆け巡るウルトラマンが全国のあちこちに存在すると聞く。これはバスケットに限らず他のスポーツでも同じである。

私は35歳の時にアキレス腱断裂を機会に「福島教員チーム」としての選手登録を引退した。ケガしてから1年間リハビリ生活を送り、その後プレイヤーとしてコートに立つことができるようになった。正式に登録しているチームがなかったので、会津高校OBチームに仲間入りさせてもらって百井杯（会津選手権大会）、会津総体などで試合を楽しむことができた。また普段の部活動指導や体育の授業などで生徒のゲームに入れてもらい、お山の大將として楽しませてもらった。

50代後半から腰に異変が生じ、生徒と共にバスケのゲームを楽しむだけでなく、コーチとして指導するデモにも困難を生じるようになった。今も孫たちやクリニックで指導する際に身体が思うように動かず残念な思いである。孫などは私が昔選手としてプレイしていたことを信じていない。来年の孫のミニバス卒団式に行われる保護者と選手の対抗試合に参加して「青春の証明」をすることが70歳以上「オー婆エイ爺」世代の私の今の目標である。

最後に、わが会津地区には高齢者の隠れ選手がかなりいると聞く。是非、「百井・松井杯」の大会に40代、または50代以上のオーバーエイジ・カテゴリー枠を新たに設けたらどうだろうか。参加希望者がいなかったらしかたがないが、高齢者の生涯バスケット、そして子供たちへの指導者増加につながっていくのではないだろうか。